



町政、県政、国政につくした高潔で信頼される政治家

しまだ しちろうえもん
島田 七郎右衛門 (1883~1962)

島田七郎右衛門は明治16年（1883）、西礪波郡福岡町（現 高岡市福岡町）に父 三代目島田七郎右衛門と母 世津の長男として生まれた。幼名は七造である。

明治34年（1901）、富山県第一中学校（現富山高等学校）を卒業後、年老いた父から「日本経済の発展に尽くすために、台湾に四十万合資会社の支店をつくりたい」という願いを聞いた。少年時代から大変責任感が強かった七造は、会社の仕事のこと、支店の経営、現地の言葉や生活習慣などについて猛勉強し、台湾に渡り支店開設に取り組んだ。苦勞の末、支店づくりに目鼻がつき、開店も間近になった明治37年（1904）、日露戦争が開戦し軍隊に入るため支店づくりを中止しなければならなくなった。日露戦争では、旅順での激戦で足を負傷し、九死に一生を得て生還した。

戦争から戻った七造は、明治40年（1907）、24歳で町の郵便局長となった。人々は、彼のことを「若いがよく出来た人である。何事も自分に厳しく、他人には広い心で接し、人を疑うことをしらない高潔で温厚な人である。」と言った。この年、四代目七郎右衛門を襲名した。

政治に強い関心のあった七郎右衛門は、明治43年（1910）、26歳のときに人々に推されて福岡町議員に当選し、“人のために尽くす”政治家としての一步を踏み出した。その後、大正4年（1915）に県議員になり、大正12年（1923）には福岡町長に推され、昭和7年（1932）には衆議院議員に当選し、昭和11年（1936）にも再選され、人格高潔で信頼される政治家として活躍した。町長就任は前後4回に及び、大正12年から通算7期（20年1か月）も務めた。

特に町政では、町村合併に心血を注いだ。当時、地域の小矢部川右岸を流れる^{がんど}岸渡川、^{あらまた}荒又川、^{とうまた}唐俣川の三河川は、川幅狭くうねり曲がっており、わずかの降雨でも宅地や耕地に氾濫し、甚大な被害を与えるあばれ川であった。町の発展、住民の幸福実現のためには、三河川の根本的な改修、治水工事が必要であり、それを実現するには、福岡町、山王村、大滝村の町村合併が不可欠であった。この合併交渉は色々な問題があつて大変難しいとされていた。しかし、七郎右衛門は地域の将来を考え、それぞれの人々の声にとにかく耳を傾け、河川改修には町村合併が必要であることを粘り強く訴え、合併の合意を取り付けた。このことにより、河川改修の計画は急速に進められ、流域の湿田、湿地帯、洪水を解消して米の増収、農地や宅地、工場用地が開発されていった。このことは、七郎右衛門の最大の功績として今も高く評価されている。

昭和33年（1958）9月、75歳の高齢であったが、住民の強い懇請により町長に就任した。昭和37年（1962）、現職のまま逝去。79歳であった。

〈専門員 眞田 武志〉



〈新旧河川比較〉
太線は旧河川
右より
荒又川 岸渡川 唐俣川

〔旧河川跡〕
— 「福岡町史」より —



岸渡川^{ほりさく}
水中堀鑿作業
(昭和19年8月頃)

— 「土地改良50年のあゆみ」
福岡町土地改良協会 より —